九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

局所進行口腔扁平上皮癌に対するS-1併用術前放射線化学療法の臨床病理学的検討

鄭, 雁群

https://doi.org/10.15017/1785371

出版情報：九州大学, 2016, 博士（歯学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

（様式３）

氏　　名　：鄭　雁群

論 文 名　：局所進行口腔扁平上皮癌に対するS-1併用術前放射線化学療法の
臨床病理学的検討

区　　分　：甲

論 文 内 容 の 要 旨

近年、局所進行した口腔扁平上皮癌（oral squamous cell carcinoma：OSCC）に対しては、外科療法の前後に化学療法や放射線療法を組み合わせた集学的治療を行うことにより治療成績が向上してきている。しかしながら、OSCC に対する抗癌剤として頻用されているシスプラチン（CDDP）は、悪心嘔吐、腎機能障害および血液学的毒性などの有害事象を有し、深刻な問題となっている。当科では、局所進行 OSCC に対し、経口抗癌剤である S-1 と放射線外照射(総線量：30 Gy)を併用した術前放射線化学療法（concurrent chemoradiotherapy: CCRT）を行ってきた。そこで本研究では、本治療法の有効性と問題点を明らかにするために、当科にて治療を行った局所進行 OSCC 患者について、臨床的ならびに病理組織学的に検討を行った。

対象は、2004 年 1 月から 2010 年 12 月に九州大学病院顎口腔外科にて治療を行った局所進行 OSCC 患者 81 名（男性 65 名、女性 16 名、平均年齢 60.7±12.9 歳）である。臨床病期別うちわけは、stageⅡが 29 例、stageⅢが 12 例、stageⅣが 40 例である。CCRT として、放射線外照射（2 Gy/日×15 回、5 回/週×3 週）とその開始 1 週間前より S-1（80-120 mg）を内服開始し、4 週間連続投与を行った。根治的手術は CCRT の終了後 2-6 週目(平均、26.4±5.8 日)に行った。有害事象の判定は、米国国立がん研究所が策定した有害事象共通用語規準(NCI-CTC、v4.0)に従って評価した。

CCRT に関連した有害事象として、最も発現頻度が高かったのは口腔粘膜炎で、全症例において観察された。そのうち Grade3 は 15 例（18.5%）であった。血液学的毒性としては、Grade3 の白血球減少および好中球減少をそれぞれ 3 例（3.7%）に認めたが、全て一過性であった。CCRT の臨床的効果は、完全奏効(complete response:CR)が 6 例(7.4%)、部分奏効(partial response: PR）が 51 例（63.0%）であった。T 分類別の臨床的奏効率（CR＋PR）は、T2 が 84.6%、T3 が 66.7%および T4 が 55.6%であった。術後、局所再発が 6 例（7.4%）、頸部再発が 2 例（2.5%）、遠隔転移が 7 例（8.6%）に認められた。全症例における局所制御率（LCR）、疾患特異的生存率（DSS）と累積 5 年の全生存率（OS）はそれぞれ 90.6%、89.9%および 87.7%であった。また、大星・下里の分類に基づいた CCRT の病理組織学的抗腫瘍効果判定では、Ⅱb 以上の抗腫瘍効果を認めた症例は全体の 75.3%であった。さらに、臨床的効果と病理組織学的抗腫瘍効果との関連性について検討を行ったところ、臨床的効果の高い症例は病理組織学的抗腫瘍効果も高く、両者に相関性が認められた。局所領域再発をきたした症例では、病理組織学的抗腫瘍効果に乏しく、深部組織に腫瘍が残存していることが多かった。

局所進行 OSCC に対する S-1 を用いた CCRT は、完遂率が高いうえに有害事象も少なく、臨床的および病理組織学的にも抗腫瘍効果が高いことから、有用な治療レジメンであると考えられた。しかしながら、局所領域再発症例では、病理組織学的抗腫瘍効果に乏しく、深部組織に腫瘍が残存していることが多かったことから、臨床的効果が乏しい症例では根治的手術の際に深部マージンの設定を慎重に行う必要があると考えられた。